

令和7年11月17日

(仮称)南ヶ丘こども園整備事業基本・実施設計業務公募型プロポーザル
評価講評

評価委員会委員長 小池志保子

八幡市では、就学前児童を取り巻く現状と課題を整理し、地域の実情に応じた持続可能な施設運営を総合的に進めることを目的として、令和3年10月に「八幡市立就学前施設再編の基本方針」を策定し、民間園を含む就学前施設全体の需給バランスに留意しつつ、小学校区単位で考え方を整理し、施設の再編を検討することとしています。このうち中央小学校区において、公立保育園2園（南ヶ丘保育園及び南ヶ丘第二保育園）を再編し、幼保連携型認定こども園へ移行することとしており、保護者との意見交換等も踏まえたうえで、八幡市立中央小学校敷地内への統合移転を進める方針としています。こども園と小学校が同一敷地内となる利点を生かして、児童園児の幼小連携活動や教職員の相互交流・研修等を実施し、こども園と小学校との一体教育の実現を目指しています。

本プロポーザルでは、一定の実績を有し、対話力、調整力、設計力が高く、期待される環境や施設の設計を遂行できる事業者を広く募るため、公募型プロポーザル方式による設計者選定を実施しました。こども園としての統合移転を円滑に実現するため、限られた設計期間の中で速やかに計画を進める必要があり、技術提案書に基づいて迅速に設計へ移行できる体制が重視されました。提案者には参加表明段階から、諸元表や各種計画概要書、配置候補地参考図、相関図などの詳細な資料を提供し、それらを踏まえた提案が示されました。

評価委員会では、提出資料をもとに、実施要領・要求水準書・評価要領に基づいて評価を実施しました。1次審査では、実績および業務実施方針（業務推進体制・スケジュール管理・コスト管理・保育環境に対する考え方）を評価し、26者の提案から5者を2次審査へ選定しました。続いて、配置技術者実績・技術提案書・価格提案に基づくプレゼンテーションを含む2次審査を行い、慎重に議論を重ね、評価点の順に受注候補者（第1位）と次点者（第2位）を選定しました。

受注候補者のキノアーキテクツによる技術提案は、本整備事業を「子どもが主役のまちづくり」と位置づけ、将来的な整備を見据えながら、幼小連携を促進するための明快な計画を提示したものです。また、対話型の設計プロセスを基盤とし、設計段階での調整が可能な建築の骨格を示すことで、遊びと生活が調和する保育環境の実現を図ろうとする提案となっています。

配置計画としては、身体感覚に寄り添う街路を適切に計画することで、幼小連携を促進するための多様な居場所をつくり出すことを提案しています。また、建物を北側に配置する場合でも南側に配置する場合でも成立する柔軟な計画の骨格が備わっており、その自立性の高い考え方が提案から読み取れたことも評価されました。さらに、既存の保育園2園の形式を踏襲し、各保育室にテラスを介して直接外から入る構成や、歩車を明確に分離したシンプルな駐車場配置は、利便性と安全性を考慮したものとなっている点も特徴です。

建物の計画としては、遊戯ホールを中心とした「口の字型」プランを採用し、明確なゾーニング、機能性、可変性を兼ね備えた提案となっています。「口の字型」プランによる建物としての骨格は、基本設計期間中に具体的なニーズを受けながら調整して設計することが可能な提案となっており、対話型の設計プロセスを通じて発生する様々な要望を吸収し、設計を深化させる体制・手法が具体的に提案されています。業務工程については、各種検討部会やワークショップの適切な頻度での設定、コスト管理面からの概算スケジュール設定、申請関連から工事入札を見据えたスケジュール設定などが的確に提案されています。1階にRC造を採用することで、木造部分を後続の工程で施工することが可能となり、木材調達の時間的余裕を確保できる点など、全体の工程を最適化させる工夫も評価されました。

一方、こうした敷地内での整備にあたっては、多様なステークホルダーとの調整が必要となります。提案にあるように、初動の条件整理はハード面のニーズ整理だけでなく、ソフト面の運用に関する理解も求められます。外部空間と内部空間の関係性や段階的なセキュリティーに対する考え方を深めることなど、こども園と小学校との一体教育の実現に向けた調整が必要となるため、早期に取り組む必要があると考えます。本技術提案は、基本の理念を的確に踏まえつつ、適切な実施体制を構築し、技術力を生かしてまとめられた実現性の高い提案です。また、プレゼンテーション時には柔軟かつ高い対話力が示されました。以上を踏まえて、本整備事業のパートナーとして、受注候補者を選定しました。今後、受注候補者には、様々な関係者と対話を重ねて、魅力的なこども園を実現していくことを期待します。

次点者の無有建築工房・ジオグラフィック・デザイン・ラボ設計共同体の提案は、子どもの生きる力を育む保育環境や、プロムナード等を含む地域の環境を形成する「つながる・まざりあう・みとめあえる 木のおうち」を特色としています。既存保育園の保育環境について丁寧にデザインリサーチを行い、本物の素材を使用し五感を育む環境を創出しようとする姿勢が明確に示されました。

配置計画としては、雁行する切妻屋根の連続により地域の街並みとの接続を図り、豊かな軒下空間や内外の連続性をバランスよく構成しています。建築計画としては、段階的なセキュリティーゾーンを設定した動線計画、引き戸を中心とした可変性のある空間構成、園児の身体性を刺激する多様で空間的な仕掛けなど、保育環境に対する提案が高く評価されました。業務工程については、木材調達に関する経験に裏打ちされた管理方針、ワークショップやヒアリングを通じたニーズ把握、ZEB化検討の適切性などが評価されました。一方、コストマネジメントについては、コンパクトに抑えた提案であるとしながら、敷地内の配置計画や大空間の表現との整合性に課題が残りました。1次審査提案から一貫した責任所在の明確さと、豊富な実績に基づく設計姿勢は特筆に値するものでした。

その他の提案者（五十音順）では、芦澤竜一建築設計事務所・水原建築事務所・VANS 設計共同企業体の提案は、大ホールを中心に、こどもホール、デッキテラス、ポタジェなどを大胆に設える試みと、コア（水回り）とフレームで構成する4mグリッドの木造架構が特徴であり、コアを中心としつ

つ可動式建具を用いたフレキシビリティの高い空間構成が評価されました。しかし、スケジュール全体と各工程の関係性、提案の規模に対する具体的なコストマネジメントについては不明瞭な点が残りました。

榊原・吉村・創都設計共同企業体による提案は、分棟形式を採用し、大小さまざまなスケールの空間を大屋根でつなぎつつ、保育室において工夫に富んだ一人ひとりの場づくりが提案されている点が高く評価されました。また、対話力の高いプレゼンテーションにも説得力がありました。一方、分棟であることに起因する外部空間の冗長性や、セキュリティー計画に関する課題点について質疑が行われました。

日比野設計・吉村靖孝・EL3 設計共同企業体の提案は、スローピング・パークを中心としたコンパクトな平面計画が特徴です。明確なアイデアと保育園設計ノウハウの融合を果敢に試み、印象深い風景をつくろうとする姿勢が示されていました。ワークショップを通じたニーズ把握や ZEB 化検討などの提案を含め、身体性を伴う建築的アイデアをこども園において実現しようとする設計者の姿勢が高く評価されました。建築計画としては、中廊下形式で諸室をコンパクトに配置し、敷地の傾斜と連動させる形で屋上園庭や遊戯ホールが計画されています。一方で、大きな屋上緑化の提案に対するメンテナンスを含む実現性について不明瞭な点が残ること、保育室の具体的な空間の読み取りが難しい点に課題があるという評価でした。

1次審査については、技術提案書を公開しないことになっているため、直接の講評は控えますが、参加者いずれの提案も十分に検討に値するものでした。改めまして、参加者の皆様には、本プロポーザル参加に際して体制を構築した上で、密度の高い技術提案書を作成していただき、熱意ある提案を行っていただきましたことに深く敬意を表します。

なお、プロポーザルは事業者選定の手続きであり、技術提案がそのまま実現されるものではありません。今後の基本設計・実施設計を通じて、子ども・保育士・保護者・教職員・関係者・地域住民にとって、単なる施設整備を超えた「まちの資源」となる充実した園づくりが進み、小学校を含む施設の価値が高まることを願っております。